The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国社会における宗教参加の社会貢献意欲への影響 ：日中比較を用いて
Author(s)	沈, 一擎
Citation	宗教と社会貢献. 2015, 5(2), p. 59-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53825
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究ノート

中国社会における宗教参加の社会貢献意欲への影響

―日中比較を用いて―

沈一擎*

The Influence of Religious Participation on Willingness to Contribute to Society in China

By Using a Japan and China Comparison

SHEN Yiqing

1. はじめに

宗教による社会貢献への寄与は、既に数多くの先行文献で論じられてきた。宗教儀式の参加や宗教への従属による寄付行為、ボランティア活動の参加、また利他的行為やソーシャル・キャピタルの強化なども、研究者の関心を集めてきた。近年では、アメリカのような一神教信仰伝統を持つ国以外の非キリスト教社会・アジア社会においても、宗教参加と社会貢献の間に関係が存在することが、論じられるようになった。その代表的な例は日本である。

日本は、無宗教国として有名であり、無宗教人口の割合が高い。実際は、現代日本社会において、無宗教を自認する人が総人口の七割から八割を占めているという［渡辺 2011］。しかし、その裏側には、無自覚の宗教性が存在し、ボランティア活動などの社会貢献を後押ししていることも、指摘された［稲場 2011］。

一方、同じく非キリスト教社会・アジア社会に所属している中国において、宗教信者の数は逐年上昇し、一般人の宗教参加も比較的に普通の現象となった。文化大革命時代に宗教信者が迫害の対象になったが、改革開放以降、次第に市民権を得って来た。中国社会科学院の編集による『中国宗教報告(2014)』も、中国現代社会における宗教参加の増加やそれの社会意義

* 大阪大学人間科学研究科・博士前期課程　syqdisver@gmail.com

について論じ、「新しい時代には、政治と宗教の関係を見直し、改革する必要がある」と、強調した［邱 2015:3］。

しかし、マルクス主義的無神論が統治していた中国では、共産党政権の宗教政策は、基本的には建国当初と変わらず、個人の信仰の自由は認められているものの、宗教活動は整然と統制されているのも、事実である［関口 2005］。また、中国伝統倫理、特に儒教倫理の中に含まれている血縁共同体（宗族）崇拝的な傾向は、現代中国人の社会構造にも深刻な影響を与えている［小室 1996:147］。また、加地［1990:145-154］は、儒教の宗教性と礼教性の二重構造について論じ、儒教倫理の影響は、祖礼信仰や祖先崇拝の礼俗などの形に留まらず、人間本質の深層に潜んでいると指摘した。よって、現代中国社会における宗教信仰は（仏教、キリスト教などの外来宗教でさえも）、ある意味では土着的な祖先崇拝や加護応報観念の延長だと言える。

このような文化、政治背景を持ち、中国社会における宗教参加は、不完全の形に留まっているとも言えるだろう。では、中国での宗教参加も日本と同様に、社会貢献に積極的に寄与しているのだろうか。アジア圏の文化背景、宗教の多様さ、無信仰者の割合の大きさなど、宗教状況において、確かに中国と日本の間には多くの共通点が存在するが、やがて中国の宗教参加が、異なる形で社会貢献に影響を与えるのだろうか。

本研究では、中国現代社会における宗教信仰と社会貢献傾向との関係に着目し、世界価値観調査(World Value Survey)による日中両国のデータの比較を通して、以上の問題点を考察していきたい。

2. 背景と仮説

2.1 「無宗教国」日本の宗教参加と社会貢献

日本は、無宗教の国としてのイメージが強く、宗教参加も欧米諸国と比べると少なく見えるが、宗教参加と社会貢献の間の積極的な関係が、明らかに存在している。例えば、寺沢［2012］は、データ分析を通して、日本での宗教非参加者に比べて定期的参加者の方が、ボランタリー組織に所属する傾向があり，ボランティア活動を行う傾向もあることを指摘した。宗教

参加による社会貢献へのコミットメントとボランティア活動、他者や社会への思いやりに相関が存在し［稲場 1998］、また、世界観と信仰を共有するボランティア同士のつながりも、活動を行う重要な精神的支えとなり、結束型のソーシャル・キャピタルを形成させる［稲場 2011］。従って、寄付への積極的な関係も期待できるという。

しかし、日本の無信仰人口割合の高さも事実であり、これについて、稲場［2011］が、日本では無宗教を自認する人が多い一方で、「無自覚の宗教性」が残る拡散宗教状況であり、見える宗教とは別のマクロの視座が必要であると指摘し、日本人の伝統の中での「和」や「調和」などの性質は、宗教性を参拝、賽銭、祈り、神の教えに関する伝統への従いなどの行為を通じて、「生活規範」として日本人の内面に定着させたと主張した。また、この無自覚の宗教性によるボランティア活動への寄与についても、論じた。

また、三谷［2014］は、非教団所属者のボランティア活動に着目し、それは宗教性によって促され、とくに拡散的宗教性によって影響を受けていると主張し、宗教性を教団所属や宗教施設での参拝といった実践的な次元だけではなく、日常生活中個人の宗教信念、経験、結果の次元を含め、多元的なものとして捉えた。

以上のように、日本の無宗教国としてのイメージは簡単には拭えないが、宗教参加による社会貢献は、確実に存在する。また、日本での宗教参加は、無意識による宗教性を含めて、様々な形で、社会貢献活動を後押ししているともいえるだろう。

2.2 中国人の倫理観、宗教観

中国人の宗教観について論及すると、「儒教」を挙げることが多い。だが、中国人の中では、「儒教」は宗教よりも、ある種の哲学や思想に近いものと考える人が多い。しかし、それもあくまで儒教の礼教性としての一面への認識に過ぎない。中国伝統で最も深い信仰は、実は、儒教倫理中の、「家」（宗族）を中心としている血縁社会傾向や血縁崇拝の部分であり、それに基づく宗教観は、アニミズム的な先祖崇拝と応報、加護観念である。この血縁重視は、中国人の「家」文化をなし、伝統思想の主たる部分を占めている［費 1985:65-70］。

費［1985:23-29］は、中国人の伝統的な社会関係を「差序関係」と称し、

水に石を投げた時に広がる波紋のように、中心にいる「家」（宗族）から離れれば離れるほど、「輪」（繋がり）が薄くなると指摘した。「輪」の内側にいる人と外側の人の待遇は、それぞれ違うようになる。従って、全ての社会関係は家族関係の拡大と延長ともいえる。

例えば、儒教の中核をなす「礼」の概念は、中国人の日常生活を構成する様々な生活局面をカテゴリー化し、それぞれにおいて役割を担う人間の行為の「外形」を規則化するものである［佐藤 1990］。しかもそれは、場合に応じてその現場にいる人々の役割を設定し、役割が相互に取り結ぶ関係を抑制して運行させるシステムである。波紋の喩を借りて言えば、中国人の倫理観において、中心にある「家」に対する「礼」は、薄い辺縁に対する「礼」とは、全く異なるものとなる。

小室［1996:142,146］も、血縁社会こそ日本と中国の間の最大な差であると指摘し、中国の血縁共同体は、内と外は全く異なり、二重の規範を持つことを主張した。共同体内部の規範は絶対である（無条件に遵守）のに対して、共同体外部の規範は軽視される。富、名誉、権力などを、社会全体よりも、先ず共同体内部で分配する傾向をもつという。

ウェーバー［1971:389］によると、儒教徒が禁欲的な振舞いをするのは、外面的な身振りや作法の威厳を保つためである。彼はまた、この自制心には、審美的な、本質的に消極な性格を持つことに着目し、身振り、あるいは「面子」（建前）の領域は儒教に起源することが、有力であると見なされるべきと指摘した。しかし、この「面子」は、あくまで表面上の（辺縁に対する）振舞いであり、内的（家的、宗族的）なものとはいいがたい。「礼」の外側を表の規則と言えば、その内側は、「家」を重んじることと言える。中国伝統的の先祖崇拝や「孝」への拘り、また地域の組織や人脈形成への重視なども、この「家」文化の表れである。

ウェーバー［1971:390-391］は、儒教の精神とピュ―リタニズムと比較し、儒教倫理の持つ独善的な性質について論じ、宗教倫理の視点からこの性質を捉えた。キリスト教的倫理の「世俗と個人の超世俗的使命とのあいだの悲観論的な緊張対立の関係とその不可避」は、「徹底的現世歓楽主義である儒教体系が為しえたほど根底から取り除くということ」は出来なかったと述べ、以下のように解釈した。

つぎのような二元間のなんらかの緊張対立は、あたかもこの〔儒教的〕倫理には存在しなかった。その緊張とは、自然と神性、倫理的要求と人間の不十分さ、罪業の意識と救済の要求、現世の行業と来世の報い、宗教的な義務と政治＝社会的な現実、等のあいだの緊張である。［ウェーバー1971:391］

言い換えれば、儒教倫理のこの独善的な（宗族や血縁集団を中心にする）宗教観では、社会全体の福祉よりも、自集団の利益が先んじるということである。

以上のように、儒教倫理は古代の哲学だと多くの中国人に認識されているが、実もある種の宗教性として、人々の内面に定着し、見えない形で人々の行動に影響を与えているとも言えよう。しかし、この儒教倫理によるこの潜在的な宗教性は、前述した日本の「無自覚の宗教性」と違って、血縁集団的、内部志向的な性質を持ち、信仰行為も、あくまで自身の利を守るための儀式であり、社会に神の恩恵を広げるという社会貢献な意味合いは持ち合わせていない。

2.3 仮説の提起

前述した考察を踏まえて、日中両国の宗教参加による社会貢献への影響を比較していきたい。先行研究を整理すると、以下二つの仮説が導かれる。一つは、(a)現代中国社会においては、宗教参加、或は神を信仰することは、必ずしも社会貢献傾向を促すわけではない。日本における宗教参加による社会貢献への影響については、すでに指摘された通り、積極的な関係が証明された。一方、中国の伝統的な宗教観についての考察によれば、中国の伝統宗教観は独善の性質を持ち、信仰を持つこと、あるいは宗教に参加することは、社会貢献に寄与しない可能性が大きい、ということ。

もう一つは、(b)伝統への重視度は、社会貢献の意欲度に影響を与えていることである。日本の「無自覚の宗教性」の源を辿ると、神の教えなど、いわば伝統の善を身の一部として定着させた場合に、人は自然と社会貢献に寄与するようになることが分かる。つまり、日本の場合に、宗教の信者だから社会貢献をするというよりも、むしろ「無自覚の宗教性」によって社会貢献に関与している。この意味で、伝統への重視度も、「無自覚の宗教性」

を解釈する場合に、有力な視点となりうる。

また、2.2 で論じた儒教倫理による中国の潜在的な宗教性も、伝統の礼儀による影響が大きいことも分かった。もし中国のこの伝統倫理による潜在的な宗教性は、日本の「無自覚の宗教性」のように、見えない形で人々の社会貢献意欲を規定することが出来るのなら、日中比較によって、データの形として現れる可能性も予想できる。

3. データと変数

本稿で使用したデータは、世界 57 カ国の 85000 人を調査対象にし、規範意識や格差認識など様々な意識データをカバーする世界価値観調査第六波調査(World Value Survey Wave6)(2010～2014)である。現段階では、本研究の分析で使用したのは、中国（2012）、日本（2010）のデータである。中国データの有効サンプル数は 2500 で、日本データの有効サンプル数は 1650 である。

先行研究に基づいて、日中両国における宗教参加による社会貢献への影響を測り、前述した仮説を証明するために、順序ロジスティック回帰分析を行う。なお、本研究では、中国と日本のデータを分けて、それぞれから（無自覚の宗教性を測るために）「伝統への重視度」を投入しない・投入した 2 つのモデルを作り、最終的に 4 つのモデルを比較することとなる。

表 1. 変数の説明

変数	説明
利社会傾向	自身に当てはまるレベル: 貴方は社会に利を与えることをする人間（6 段階）（反転）
祈りの参加頻度	婚礼、葬礼以外に参加する祈りの頻度（7 段階）（反転）
日常生活中神の重要度	生活中感じる神の重要性（10 段階）
伝統主義傾向	自身に当てはまるレベル: 伝統や慣習を守る人（6 段階）（反転）

従属変数として、社会貢献への意欲度を測ることができる「利社会傾向」を投入した。独立変数として投入した項目は、基本属性の「性別」、「年齢」、「配偶の有無」、「学歴」、「収入水準」以外も、宗教参加を測る「宗教信

仰状況」、「祈りの参加頻度」、「日常生活中神の重要度」などの変数を投入した。また、無自覚の宗教性を測るために、伝統への重視度を測る変数「伝統主義傾向」をも投入した。具体的には、表 1 を参照。

4. 分析結果と考察

4.1 データ分析

本研究では、従属変数（利社会傾向）が 5 つのカテゴリーで構成されている質的変数であるため、順序ロジスティク回帰分析を分析方法とした。表 2、表 3 は、それぞれ日本と中国のデータによる分析結果である。

表 2（日本）と表 3（中国）の分析結果を比較してみると、日中両国における宗教参加の社会貢献意欲への影響が異なる性質を持つことが分かる。表 2 でも表 3 でも、項目「伝統主義傾向」の投入によって、結果に変化が生じている。

先ず、日本の場合(表 2)を見ていこう。モデル 1 の-2 対数尤度は 4141.815 であり、0.1%水準で有意である。モデル 1 を見ると、女性よりも男性、また非信仰者と無神論者よりも信教者の方が、社会貢献をする意欲が強いことが分かる。また、年齢、収入、生活中神の重要性が高いほど、社会貢献の意欲が強くなることも分かる。日本の場合では、男性であるほど、収入と年齢が高いほど、社会的地位が高くなるので、その社会地位に応じて、社会貢献意欲が高くなることも推測できる。

モデル 2 の-2 対数尤度は 3967.504 であり、0.1%水準で有意である。その結果を見ると、新しく投入した項目「伝統主義傾向」は、社会貢献意欲度に強い正的な影響を与えていることが分かる。モデル 2 では、男性であること、年齢、収入などの項目は、依然と影響を示している。

項目「伝統主義傾向」の投入によって、信教者であることと日常生活で神の重要度の影響の強さ下がっているが、依然と強い関係を示している。また、祈りに参加する頻度は、社会貢献意欲度に対して、負的な効果を持つようになっている。これについて、祈りなどの宗教儀式に頻繁に参加するほど、仕事や勉強などのために費やす時間が少なくなり、社会貢献への意欲も少なくなると解釈できる。

一方、中国の場合（表 3）では、異なる結果を示している。モデル 3 の-2 対数尤度は 4493.801 であり、0.1%水準で有意である。モデル 3 を見ると、収入と学歴が高いほど、また、信教者であれば、社会貢献意欲が強くなることが分かる。日本の場合と違って、日常生活で神の重要度は、社会貢献意欲度に負的な影響を与えている。中国の場合では、収入と学歴が高いほど、社会的地位が高いので、社会貢献意欲度も高くなることが推測できるが、社会貢献意欲度日本年功序列のシステムは日本ほど普及していないので、年齢による影響が見られていない。

表2.「利社会傾向」を従属変数とする順序ロジスティクス回帰分析の結果（日本）

	モデル1		モデル2	
	B	S.E.	B	S.E.
男性ダミー	.258*	.100	.229*	.102
有配偶ダミー	-.139	.119	-.159	.121
年齢	.022***	.004	.016***	.004
収入水準10段階	.052**	.019	.044*	.019
学歴4分類	.185*	.084	.153	.085
信教者ダミー	.497***	.131	.382**	.134
無神論者ダミー	.262	.155	.289	.158
非信教者ダミー(ref.)	---		---	
祈りに参加する頻度	-.020	.030	-.070*	.031
日常生活で神の重要度	.103***	.023	.078**	.023
伝統主義傾向	---		.430***	.047
Cox&Snell	.078		.132	
McFadden	.027		.048	
-2LL	4141.815***		3967.504***	
N	1431		1400	

*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001

表3.「利社会傾向」を従属変数とする順序ロジスティクス回帰分析の結果（中国）

	モデル3		モデル4	
	B	S.E.	B	S.E.
男性ダミー	.126	.091	.108	.092
有配偶ダミー	-.117	.124	-.178	.125
年齢	.006	.004	.002	.004
収入水準10段階	.056*	.025	.075**	.025
学歴4分類	.201**	.066	.222**	.066
信教者ダミー	.368*	.162	.246	.164
無神論者ダミー	.149	.105	.270*	.107
非信教者ダミー(ref.)	---		---	
祈りに参加する頻度	-.081	.043	-.067	.043
日常生活で神の重要度	-.078***	.020	-.077***	.021
伝統主義傾向	---		.430***	.037
Cox&Snell	.032		.106	
McFadden	.011		.039	
-2LL	4493.801***		4419.306***	
N	1634		1626	

*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001

モデル 4 では、項目「伝統主義傾向」の投入によって、信教者ダミーの影響力が低くなり、有意で無くなる。日本の場合と同じく、伝統主義傾向を持つほど、社会貢献への意欲度が強くなる。無神論者ダミーの影響が強くなり、有意になる。これは、無神論を主張する共産党政治を中心とする現代中国において、エリート階層であるほど、無神論者になりやすいという現状に合致している。

4.2 相違点

両国の分析結果を比較し整理すると、2 つ主な相違点が存在することが分かる。先ずは、(1)信教者であることによる社会貢献度への影響の強さが違う。日本の場合に、信教者であることは、社会貢献意欲に強く寄与し、「伝統主義傾向」が投入した後にそのやや小さくなったものの、依然と強い正的な影響力を発揮している。一方、中国の場合には、信教者であることの影響は弱く、「伝統主義傾向」の投入した後に有意で無くなる。「宗教を信仰しているから社会に貢献したいではなく、元々社会に貢献したい伝統主義傾向（無自覚の宗教性）を持つ人が、宗教に関わりやすい」ことは、

両国のいずれでも見出されるが、日本の場合では、信教者であることによる社会貢献意欲への正的な影響は、中国を遥かに超えている。

次に、(2)「日常生活で神の重要度」による影響が異なる。表 2、表 3 を比較してみれば分かるように。日本の場合では、日常生活で神の重要度と社会貢献への意欲の間に正的関係が見出されたが、中国の場合では真逆な傾向を示している。つまり、日本においては、生活中神の重要性が高いほど、人の社会貢献意欲が強くなることである。

この点は、相違点(1)の宗教信者の社会貢献意欲の差にも合致しており、また、前述したように、日本社会においでは、「無自覚の宗教性」が存在し、宗教信者ではなくても、「宗教の心」を大事にし、神に敬虔を抱いている。その心もまた、人をボランティア活動などの社会貢献に参加させるように影響を与えている。神を重視するほど、社会への貢献意欲が強くなってもおかしくない。

一方、中国では、信教者ダミーの影響力が日本ほど強くないのもそのためであるように、神や宗教と社会貢献は、分断的に認識されている。そのため、両者の間には、必ずしも正的な関係を持つとは限らない。むしろ、儒教倫理による潜在的な宗教観の影響で、現代の宗教そのものは、土着信仰や先祖崇拝の延長や代替品として役割を果たしているため、神を深く信仰する人の多くは、実際の利益を重視する、社会貢献とは無縁の利己主義者であると解釈できる。

以上の二つの相違点は、仮説(a) 「現代中国社会においては、宗教参加、或は神を信仰することは、必ずしも社会貢献傾向を促すわけではない。」と合致している。

4.3 共通点

分析結果を比較すると、モデル 2 と 4 で投入された「伝統主義傾向」は、同じく社会貢献意欲度に強い正的影響を与えることが分かる。この結果は、仮説（b）を証明した。

日本の場合に、既に前述したように、「無自覚の宗教性」が、和を重んじる日本人にとって、集団内部の「和」を保つための、一種の調和とも言える。和合における集団への奉仕、和の追求は、他者を思いやる「利他主義」の契機ともなる［稲場 2011］。「伝統主義傾向」で現れる「無自覚の宗教性」

は、社会貢献意欲度を増加させるのも、この結果に合致している。

中国の場合においても、日本と似たような傾向を示した。しかし、注意すべきなのは、日本の場合には、「伝統主義傾向」を投入しても、宗教信者による社会貢献傾向は、依然と強い影響を持つ一方、中国の場合には、「伝統主義傾向」を投入した後に、宗教信者による社会貢献意欲への影響はなくなる。この結果については、中国の場合に、宗教信者であることよりも、実は人々中の「伝統主義傾向」の方が、社会貢献に寄与していると解釈できる。

ここにある問題は、もしこの「伝統主義傾向」は、儒教倫理による潜在的な宗教観の影響を反映しているのなら、（伝統主義傾向が強いほど社会貢献意欲が高いという結果は）前述したこの宗教性の「独善性」とは矛盾するようになる。しかし、注意すべきなのは、日本の場合、「伝統主義傾向」の投入によって、日常生活で神の重要の効果大きく変わった（B=0.103→0.078）一方、中国の場合ではほとんど変わっていなかった。日本と違って、中国の「伝統主義傾向」と「日常生活で神の重要性」との間には、関係が存在していない。つまり、中国人の伝統主義に対する認識の中には、神仏などの概念はさほど入っていないということである。

この「伝統主義傾向」での差から見ると、日中両国の「見えない宗教性」を単純に同質なものと見なすのは不適切だと思う。「伝統主義傾向」だけで中国の潜在的な宗教性を説明出来ない可能性も高い。儒教倫理による潜在的な宗教性は、何らかの独特な性質をもつことは明らかであるが（例えば、伝統と宗教が分断的に認識されること）、これについて、更なる考察が必要となる。

5. おわりに

日中両国の比較分析を通して、現代中国社会における信教参加による社会貢献意欲度への影響の実態に迫ることが出来た。前述したように、中国現代社会の宗教参加は、政治、文化などの原因でまだ不完全な状態に留まっている。中国の宗教信者は、日本と違って、社会貢献への意欲は、ほとんど見られていない。また、生活中神の重要度が高いほど、社会利益には

無関心である。それは、中国現代社会の宗教は、伝統的血縁集団による祖先信仰の延長線上にあるものとしての意味が強く、アニミズム式の鬼神観念は、そのまま宗教の形となって、大きいな影響力を持っているためだと考える。

一方、「伝統主義傾向」というアプローチを通して、中国においても、日本の「無自覚の宗教性」に似たようなものが見出された。中国の場合、「伝統主義傾向」の投入によって、信仰者ダミーの効果が無くなった。これは、中国人の社会貢献意識は、実際の宗教参加よりも、伝統主義傾向に関係していると示唆しているが、しかしこれもまた「独善的」な伝統倫理と矛盾を感じる。しかし、日中両国での「伝統主義傾向」が、異質的な存在であることも判明した。中国の場合、潜在的な宗教性を究明するためには、更なる検証が必要である。

参考文献

費孝通 1985 『郷土中国』 三聯書店。

稲場圭信 1998 『利他主義・ボランティア・宗教: イギリスにおけるチャリティ』東京大学宗教学年報 (16):27-42。

稲場圭信 2011 『無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル』 宗教と社会貢献 1(1), 3-26。

加地伸行 1990 『儒教とは何か』 中公新書。

――― 1994 『沈黙の宗教儒教』 筑摩書房。

――― 1997 『現代中国学―「阿 Q」は死んだか』 中公新書。

小室直樹 1996 『小室直樹の中国厳原論』徳間書店。

三谷はるよ 2014 『日本人の宗教性とボランティア行動』 ソシオロジ 58(3):3-18。

邱永輝 編 2015 『中国宗教報告』 社会科学文献出版社。

櫻井義秀 2011 『ソーシャル・キャピタル論の射程と宗教』 宗教と社会貢献 1(1), 27-51。

佐藤俊樹 1990 『「儒教とピューリタニズム」再考』 社会学評論 41(1):41-54。

関口泰由 2005 『中国共産党政権下における宗教--宗教政策を中心として』 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 (5):68-78。

寺沢重法 2012 『宗教参加と社会活動』現代社会学研究 25(0):55-72。

渡辺浩希 2011 『日本の宗教人口--2 億と 2-3 割の怪の解』 武蔵野大学仏教文化研究所紀要(27):25-37。

Weber, Max 1920 *Konfuzianismus und Taoismus, Gesammelte Aufsätze zur*

Religionssoziologie I. Tübingen: JC B Mohr 305. マックス・ウェーバー 1971 『儒教と道教』木全徳雄訳、創文社。